

デフォーが記録したパンデミック下の都市生活

小林 浩史

ダニエル・デフォーと言えば「ロビンソン・クルーソー」の著者として知られているが、彼は 1664 年から 65 年にかけてロンドンで猛威をふるったペストの記録も残している。アルベールカミュの「ペスト」が小説であるのとは異なり、デフォーの記録は実際に大都市ロンドンで生じたことをまとめてあり、記述内容のリアルさ・詳細さは一読に値する。ここでは、当時の大都市ロンドンの市民生活が疫病によってどういう影響を受け、人々がどんな行動をとったかを紹介しようと思う。¹

1664 年の秋にロンドンの一部の地区で発生したペストは、翌年に入ると市内全域に蔓延するようになり、「対岸の火事」と見なしていた地区の住民も慌てて郊外への疎開や買い占めに走るようになる。

ロンドン市当局は、患者が発生した住戸を個別に封鎖する措置を執り、玄関を封鎖して監視人を配置するなどして、住人の出入りを厳しく監視した。しかし、生活の必要に迫られた住人は、監視人の目を盗んで裏口から抜け出したり、監視人の買収を試みたりとあの手この手で封鎖を破ろうとする。

また、市内での生業に関係しない職業の人々や地主階級は、我先にと家財道具をまとめてロンドンから郊外に脱出する。デフォーも実兄から一緒に逃げようと誘われるが、何が起きているか記録したい、見ておきたいという欲求が勝り、ロンドンに残ることにした。

市内に残された人々は、できる限り互いに接触を避けるように様々な工夫を凝らす。市場では商品の手渡しを避けフックにつるしてやりとりしたり、おつりをもらわないように小銭をきっちり用意したりと神経をすり減らす。都市生活に必要な食料も通常ならば周囲の農村から市内に運び込まれるのだが、農民が疫病の蔓延する城内に入るのを嫌うため、城壁の入り口に農産物交換所を設け、城内から商人が出てきて引き取る、といった具合。

ペストの流行が続くにつれロンドン市民の精神的ストレスは高まっていく。大声で市内を叫びながら徘徊する男が現れたり、居酒屋ではやけになって大騒ぎ

して神をののしる輩がたむろしたり。この居酒屋でデフォーは、家族すべてを喪って意気消沈している男性を見かける。大声で騒いでいる連中がその男性をさんざんからかうので、デフォーは連中に意見するが「酒を飲んで何が悪いか」と絡まれ、ショックを受けて家に帰っていく。

デフォーが記録した 17 世紀後半のロンドンと現代の我々が生活する都市では状況が様々に異なるが、市民一人一人を襲ったストレスや、各自の行動・リアクションについての記述を読むと、人間はいつの時代でも同じような反応を示すものだ、という感慨を呼び起こす。

また、居酒屋でのやりとりは、我々も直面したソーシャル・ディスタンシングへの対処のあり方とも通じる部分があろう。都市生活者は、平時であれば個人主義に基づく行動の自由が尊重されるが、極限状態でのそのあり方については、簡単に割り切ることはできない。コロナウイルスに直面した我々同士の間での熟議が必要となろう。

なお、デフォーの「ペスト」では、各地区での感染者数が事細かに列記され、「〇〇地区でこの 1 週間に発生した感染者数が何人に上った」「いったん減少に転じて地区の住民はほっと胸をなで下ろしたが、再び人数が増加に転じた」といった記述が延々と続く。現在の我々にはこれを退屈と感ずることはできないだろう。姿形も見えずに忍び寄ってくる疫病の、唯一の足跡が感染者数だということを我々は日々痛感している。

デフォーの「ペスト」は読者ごとの読み方が可能である。たぶん、近い将来読み返してみれば、その時点で我々の置かれた状況に照らして新たな発見があるかも知れない。蛇足になるが、ペストが猛威をふるった翌年にはロンドンを大火が遅い、市内のほぼ全域が焼失した。しかしロンドンはこれらの災厄から不死鳥のように復活を遂げ、18 世紀には大英帝国の首府として栄華を極めることになる。

¹ 原題は *A Journal of Plague Year* (疫病年代記)。ペストがロンドンで発生した時点でデフォーはまだ少年だったので、この記録は彼が成人してから集めた新聞記事や当事者からの聞き取りなどの同時代資料に基づく。「ペスト」の中では彼自身も当時のロンドンに登場させているが、この部分は創作とすることになる。